刺激ある日常 再び

▲ 出前で注文した「はらこ飯」。いつもは食が細い人も、おいしそうに完食した（10月14日、石巻市の仁風園で）

施設内に臨時開業したパン屋で品定めする女性（10月21日）

いま命をめぐって

仁風園 4

仁風園では10月、入所者向けのイベントを立て続けに企画した。

まずは昼食の出前。ふだんは施設で調理された食事を食べるが、この日は希望を聞いて注文を取りまとめ、はらこ飯や天丼などを近所の食堂から届けてもらった。勢いよく平らげる人がほとんどで、「よくかんで食べてね」と職員に心配されるほどだった。

別の日は仙台から業者を呼び、廊下の一角にパン屋を開いた。菓子パンのほか、ケーキや団子、カステラがずらりと並んだ。

じっくり品定めし、「これがいい」と女性(87)が5個入りのパンの袋をさす。隣で職員が「そんなに食べられるの？」と笑って尋ねると、「全部食べられなくともいいんだ」。結局、イチゴのパン一つだけにして、満足そうに居室に戻っていった。

認知症でも楽しかったことは記憶に残る。翌日になっても「はらこ飯はおいしかった」と言ってくれる人がいて、ユニット個室の介護主任・高橋美保さん(42)はまずまずの手応えを感じていた。

コロナの感染拡大とともに、お年寄りたちの関心ごとが一つ、また一つと消えていく。それは想像以上に深刻な状況だった。

たとえば以前は月に1回、施設のホールに売店がやってきた。小遣いを手に菓子や日用品を買い求めるのが、ちょっとした楽しみだった。ところが業者を呼べなくなると、次はあれがほしい、あれを食べたいという発言が聞かれなくなった。たまに車を借りて出かけた花見や遠足も、家族との一時外出も、いざ失われてみると分かる。日常の中のささやかな刺激は、未来を向く視線であり、生きる意欲そのものだった。

出前とパン屋は今回、試しにユニット個室の一部だけを対象にした。次にパン屋を開くときは自分で商品を選べない重度の認知症の人にも範囲を広げ、雰囲気を味わってもらおうか、と高橋さんは考えている。